

# 室内楽の未来

## 「室内楽の未来」

このスローガンを聴いて皆さんの思い描く「未来」はどんなイメージでしょうか。

現代、コンピューター音楽やAIの音楽などをやる「未来」の音楽創造も同時進行で次々と誕生しています。今も尚、テクノロジーという手法と、人間の生み出す究極のアナログを融合させながら、様々な作品が生み出されています。100年後のMusic from PaToNaには、それも古典として愛されているかもしれません。

クラシック音楽は、再現芸術です。作品が生まれ、様々な音楽家たちに繰り返し演奏され、ある時代からは録音として残され、一部は淘汰され、時代により葬り去られては、また誰かが見つけて、演奏されるなど繰り返しています。そして、音楽を学ぶほとんどの人が「古典」と生涯向き合っています。それほどまでに過去の作品は、研究され、追及され、そして聴衆と分かち合われてきました。

人類の歴史もまた様々な「繰り返し」があります。良いことも悪いことも。人類が音楽や芸術とともに潜り抜けてきた時代。過去にひもとける感情への共感は少なくありません。今年のMusic from PaToNaでは、故きを温ねて新しきを知る、常にそうして作り上げてきたその時代時代の「未来」について、お客様と見つめます。

このシリーズの中ではこれまでなかなか取り上げて来られなかった邦人作曲家の室内楽作品。あまたある中でも、Music from PaToNaならではの味わい深い作品を選んでみました。

地元の貴重な音楽資産である、仙台フィルハーモニー管弦楽団のメンバー、仙台、東北ゆかりの奏者たち、そしてその友人たちがまた仙台に集い、音楽を届けてくれます。

Music from PaToNaでは、当日のパンフレットに曲目解説の文章がありません。その代わりに、オープンゼミナールや、当日の司会による解説で音楽の魅力を、そちらも「生」でお届けしてきました。音楽監修の三宅進、プランナーの助川龍、西沢澄博が、アイデアを出し合い、奏者の目線と、客席の目線を考えながら、創意工夫を重ね、室内楽の魅力を伝えてまいりました。決して有名曲だけではなく、各楽器のために生み出されたような多彩なジャンルの室内楽曲を演奏し、仙台のMusic from PaToNaのお客様は、本当に多くの室内楽作品を耳にされていることとなります。

Music from PaToNaの歴史とともに結成年数を重ねるレジデントカルテットQuartet PaToNaや、毎回の奏者編成によって響きを変える生演奏の開演ベルも皆様には好評を頂いています。様々な形で、室内楽と出会えるのが、Music from PaToNaの最大の魅力。2024年のラインナップ各回詳細は次頁からをご覧ください。

音楽監修	三宅 進	仙台フィルハーモニー管弦楽団チェロソロ首席奏者
プランナー	助川 龍	仙台フィルハーモニー管弦楽団コントラバスソロ首席奏者
プランナー	西沢 澄博	仙台フィルハーモニー管弦楽団オーボエ首席奏者